■第１章－伽藍について■

現在の四天王寺は、飛鳥時代の創建伽藍（そうけんがらん）の真上に建っています。

その事が明らかになったのは、昭和９年の塔基壇跡（とうきだんあと）の発掘調査です。

江戸時代に再建された塔心礎（とうしんそ）の真下から、立派な地下式塔心礎が発見されました。

金堂については、第二次大戦後の復興にともなう発掘調査で、９６０年の伽藍焼亡後に再建された基壇の下に下層基壇が存在することが明らかになっています。

金堂の創建基壇は明らかになっていませんが、７世紀後半以降に、切石積（きりいしづみ）基壇が整えられたことが明らかになっています。

講堂、中門、回廊は、塔や金堂よりも造営が遅れることがわかっています。

創建当初は、塔と金堂を掘立柱塀（ほったてばしらべい）で囲った伽藍だったと考えられています。

さらに、創建期の四天王寺で注目されるのは、発掘調査で建物計画溝が確認されたことです。

このことから、講堂の東西には当初、付属建物が計画されていた可能性が指摘されています。

中門、塔、金堂が一直線上に並ぶ、一塔一金堂式の伽藍配置は、朝鮮半島の百済（くだら／ひゃくさい／ペクチェ）を中心に採用されており、講堂の東西に付属建物が複数存在したことも、発掘調査で明らかになっています。